ひょうごの森と水辺の生き物を訪ねて

（一社）兵庫県治山林道協会

発刊にあたって

「ひょうごの森と水辺の生き物を訪ねて」は（一社）兵庫県治山林道協会の機関紙「やまなみ」の第34号から第43号までの10号分、５年間に渡り掲載された記事を取りまとめたものです。筆者の佐藤邦夫氏は兵庫県の林学職員のOBであり、森林に生息する動植物や昆虫はもとより、環境問題にも詳しいことから本協会が年２回開催している「林道自然観察ウォーキング」の講師もお願いしており、連載を快く引き受けていただき長期間の執筆を担ってくださいました。

ご案内のとおり、兵庫県は北は日本海から、南は瀬戸内海、太平洋に面しており、県土の３分の２を占める森林は約４割が天然林である広葉樹林です。植生分布をみると一般的に二次林と呼ばれているコナラ林やアカマツ林が広い面積を占めており、森林内では、多種多様な動植物が生息生育しています。また、多彩な自然に加え、ため池や里山などの人の手により維持されてきた多様な環境により、生物多様性が豊かな環境を有しています。

本冊子は兵庫県内の特色ある森林や水辺の動植物を紹介するだけでなく、兵庫県のレッドデータブックでの位置づけや、生態の動向や問題等わかりやすく解説されています。

本冊子が環境保全への意識を高め、ふるさと意識をはぐくむ一助となれば幸いです。

2020年６月

一般社団法人　兵庫県治山林道協会
参　事　　前田　康宏

目　次

CONTENTS

●発刊にあたって

●目　次

●位置図…… 3

●本文

1　ちくさ高原を歩く…… 4

2　東山高原を歩く…… 8

3　鴨池公園を歩く…… 12

4　かわい快適の森を歩く…… 16

5　谷池を歩く…… 20

6　皿池を歩く…… 24

7　神鍋山の噴火口跡を歩く…… 28

8　峰山高原を歩く…… 32

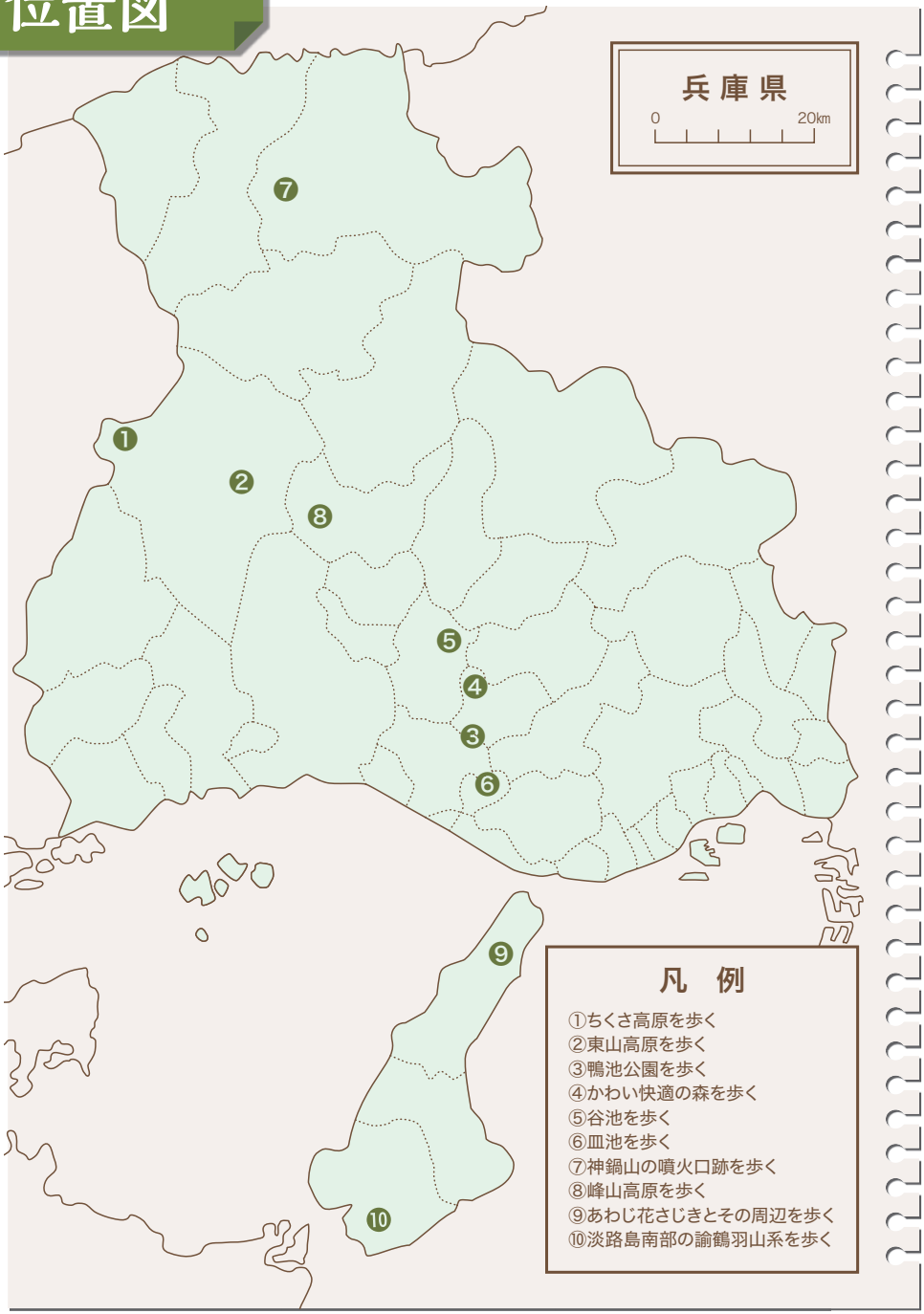
9　あわじ花さじきとその周辺を歩く…… 36

10　淡路島南部の諭鶴羽山系を歩く…… 40

●索引（動物、植物、菌類）…… 44・45

●あとがき…… 46

位置図


兵庫県
0
20km
凡　例
①ちくさ高原を歩く
②東山高原を歩く
③鴨池公園を歩く
④かわい快適の森を歩く
⑤谷池を歩く
⑥皿池を歩く
⑦神鍋山の噴火口跡を歩く
⑧峰山高原を歩く
⑨あわじ花さじきとその周辺を歩く
⑩淡路島南部の諭鶴羽山系を歩く

1

ちくさ高原を歩く

はじめに

ネクイハムシというハムシ科の甲虫がいます。あまり知られていませんが、日本の泥炭層から出土する昆虫化石の大半はゴミムシ科の甲虫とネクイハムシ類なのです。ネクイハムシは日本から23種が知られていますが、２、３の種を除いてすべて稀少種です。それは生息地が限られているからであり、生息地に行けばたくさん見られる種がほとんどです。スゲなどの生える湿地に生息する種類と池沼に生息する種類があります。兵庫県からは10種が知られていますが、特殊な環境に生息することから十分な調査が行われておらず、兵庫県版レッドデータブック（RDB）2012では絶滅１種、Ａランク２種、Ｂランク１種、Ｃランク２種、要調査１種の７種が登載されています。ネクイハムシの生息する湿地は、土地利用において邪魔になりこそすれ必要とされるものではないため、埋め立てられたり、水を抜かれるなどして急速に姿を消しつつあります。逆に、古い治山堰堤などでは新たに湿地が形成されている例も見られます。筆者はこのネクイハムシをもっとよく知ろうと、県下各地の湿地やため池を調査していますが、その際、ネクイハムシだけでなく、様々な動植物を観察する機会に恵まれ、改めて兵庫県の自然の豊かさを感じずにはいられませんでした。このたび、兵庫県治山林道協会から機関誌「やまなみ」に発表の機会を与えられたことで、写真を通じて豊かさの一端でも知っていただけたら幸いです。

ちくさ高原の概要と生き物

ちくさ高原は兵庫県の中西部、岡山県と境を接し、標高800m付近から標高1,163mのダルガ峰に至る地域です。ここは草原、湿地、渓谷、森林と多彩な環境があり、多様な生物相に触れることのできる場所ですが、県下の山間部の例に漏れずシカの増加が目立ち、生物相に様々な影響を与えています。シカの不嗜好植物であるクリンソウの群落は年々大きさを増し、今では立派な観光資源となっています。当初の目的であるネクイハムシの仲間はキヌツヤミズクサハムシが生息しています。スゲハムシとも呼ばれるように、成虫は湿地のスゲ類に集まり、中部山岳の高層湿原では最普通種ですが、県下では最も標高の高い場所に生息するネクイハムシのため分布は限られています。食草のスゲ類はシカがあまり好まないようで、目立った被害は受けてないようです。文献によると、ここには兵庫県で唯一ツヤネクイハムシの記録もありますが、筆者はまだ見ていません。紙面の都合もあり、ごく一部しか掲載できないのは残念ですが、なるべく地域の特徴がわかるようなものを紹介します。

キヌツヤミズクサハムシ
（兵庫県版RDB2012　Cランク）

通常は黄金色をしているが、♂に限り青色や青黒い個体も出現する。スゲ類の葉や花穂に多く、60頭以上が群れる花穂もあった。

クリンソウ
（兵庫県版RDB2010　Bランク）

シカの食害を受けないことから年々群落の規模を拡大している。写真のほかにも数か所大きな群落がある。

フタコブルリハナカミキリ

上層に咲くミズキの花に飛来したものが、クリンソウの上に下りてきたと思われる。大型のハナカミキリで兵庫県では少ない。

レンゲツツジ

湿地の縁に多く見られ、シカの不嗜好植物であることから年々増加している。

モリアオガエル
（兵庫県版RDB2003　Bランク）

水辺の樹木に下がった卵嚢はよく見かけるが、成体を見ることは少ない。

サラサドウダン
（兵庫県版RDB2010　Bランク）

県境のダルガ峰周辺に多い。樹皮をシカに食害されている場合が多く、幼木が見られない。

ミヤマサナエ
（兵庫県版RDB2012　Cランク）

大きな河川の下流域で幼虫は発見され、成虫は遠く離れた高地に移動する。写真の個体は何処から来たのだろうか。

ムカシヤンマ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

同じサナエトンボ科の大形種であるミヤマサナエとは異なり斜面の滲出水があるような場所で幼虫は生育する。成虫もそのような場所の近くで見られる。

エゾハルゼミ
（兵庫県版RDB2012　要注目）

ミョーキーン・ミョーキーン♪と変わった声で鳴く。ハルゼミの仲間は垂直に止まらず、横枝などにいる場合が多い。

ウスバシロチョウ

アゲハチョウ科の種類で氷河期の遺物と言われている。かっては宍粟市内にたくさんいたが、幼虫の食草であるムラサキケマンがシカに食べられ激減している。

エビネ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

クリンソウの群落近くに数十株の群落があったが、シカに食べられたのか今は見られない。

ノリウツギ

草原の縁や道路脇に咲き、多くの昆虫が訪れる。写真の花にはフタスジハナカミキリ、ヨツスジハナカミキリ、マルガタハナカミキリなどが見られる。

地際部分をシカに剥皮されたスギ

枯死することはないが、材としての価値が低下するため、数十年かけて育てた苦労が水の泡となってしまう。

2

東山高原を歩く

東山高原の概要

東山高原は揖保川支流引原川の東、宍粟市波賀町の中心部上野地区の背後に位置する標高600m付近から標高1,016mの東山に至る地域です。ここは、かって牛の放牧場であったところに、戦後の拡大造林施策で植林が行われ、今ではほぼ山頂までスギの人工林となっています。その結果、植林が困難であった山頂に至る尾根筋とか、規模は小さくなったものの、東山湿原に本来の自然植生がわずかに残っている状態です。平成10年代になって、「フォレストステーション波賀」として宿泊施設やオートキャンプ場などが整備され、今では多くの人が登山や高原散策に訪れています。

東山高原の生き物

東山湿原は最初にネクイハムシの調査を行った思い出の場所です。調査の結果、ネクイハムシの仲間はトヤマオオミズクサハムシとカツラネクイハムシの２種が生息していました。この２種は同時期、同所的で見られますが、性質や形態は正反対で、地味な銅金色をした太目でノンビリ屋のトヤマと、黄金から赤、青、紫など様々な色彩がある小柄でセッカチなカツラという感じでしょうか。湿原にはクモやジョウカイボンなどの捕食性昆虫、空中にはシオヤトンボやムシヒキアブ、水面にはアメンボやイモリなど多くの天敵がいます。どちらの種にとっても、これらの天敵から身を守るために、長い間かかって獲得した形質なのでしょう。施設整備される以前の東山湿原を訪れたことがあります。茂みをかき分け目の前に突然現れた湿原には、世界最小のトンボであるハッチョウトンボが飛び交い、トンボソウなどのラン科植物がたくさん咲いていました。しかし、今では湿地の乾燥化が進み、水に覆われた部分はずいぶん小さくなりました。この影響なのかハッチョウトンボはほとんど見ることはできません。10年ほど前に写真を撮ったのですが、ピンボケのその姿から、まさしく幻のトンボになってしまいました。ラン科の植物もめっきり少なくなり、代わりに目につくのは、シカの不嗜好植物といわれるハンカイソウやサワオグルマなどのキク科植物です。東山への登山道も同様で、ウリハダカエデとアセビがやたらと目につき、地面はヒカゲノカズラに覆われるか裸地化しています。それでも、早春から初夏にかけて山頂に至る登山道にはアセビ、カマツカ、タンナサワフタギなどの花が次々と咲き、山頂の展望台から見下ろす景観は庭園のようですばらしいものです。

ハンカイソウ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

東山湿原を代表するキク科の植物で、シカの不嗜好植物でもあり年々規模を拡大し、６月下旬から７月上旬には湿原を黄色く染める。

カツラネクイハムシ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

ある程度の規模がある日当たりの良い湿地に生息する。ハリイなどの細い茎に止まっていることが多く、人の気配に敏感で近づくとすぐに飛び立つので撮影が難しい。

トヤマオオミズクサハムシ
（兵庫県版RDB2012　Aランク）

カツラネクイハムシとは異なり、林間の小規模な湿地にも生息する。動きも緩慢で幅の広いザゼンソウやハンカイソウの葉の上にいることが多く、飛び立つことはない。

ホソミオツネントンボ

山間の湿地にはイトトンボの仲間は少ないが、このトンボだけはたくさん見られる。成虫で越冬する３種のトンボのうちの１種で、羽化当初は褐色だが越冬後は青くなる。

ミヤマカワトンボ

渓流に多いトンボで湿地には見られない。世界最大級のカワトンボと言われている。

ヨツメトビケラ

渓流に多いが湿地でも見られる。オスは４つの大きな黄色い紋を持ち、ヒラヒラと蝶のように飛ぶ。幼虫は渓流釣りの餌としても有名である。

トキソウ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

かっては湿原のいたるところに咲いていたが、現在はあまり見られない。湿地はラン科植物の宝庫であったが、最近はいずれの種も少なくなった。

クロルリトゲハムシ

全身棘だらけのいかつい姿をしているが、ススキの葉に短い脚でしがみついている様は愛らしい。古い図鑑にはクロルリトゲトゲという名前で載っており、こちらのほうがしっくりくる。

アケボノソウ

渓流や湿地の周辺で見られ、花弁にある独特の模様が印象に残る。リンドウ科のセンブリと同じ仲間なので、シカの不嗜好植物かもしれない。

ヒメツチハンミョウ

早春に多く、地上の様々な植物を食べる。カンタリジンという漢方で使われる物質を持ち、他の動物から身を守っている。
幼虫は数奇な運命を経てハナバチ類の巣に寄生し、過変態という独特な成長方法をとるなど、興味の尽きない昆虫である。

サラサドウダン
（兵庫県版RDB2010　Bランク）

播磨北西部の山頂部や尾根筋に多く分布している。東山山頂の写真の株は四方に大きく枝を広げ、たわわに花をつけることから、シンボル的存在となっている。

アセビ

シカが最も嫌う植物で、早春の東山山頂に至る登山道を白く染める。ピンクの花や赤い新芽など園芸用に品種改良されたものをよく見かける。

ブナ林

東山山頂近くにわずかに残っている。早春のブナ林は明るく清々しい気分になるが、シカの影響か、林床に緑色のものは見られない。

3

鴨池公園を歩く

鴨池公園の概要

鴨池公園は小野市南西部に位置し、鴨池（男池）と隣接するゴルフ場を囲む地域で、周囲に４㎞弱のハイキングコースが整備されています。池の西側はよく管理された農耕地ですが、北側は雑木に覆われ、人の手があまり入ってないようです。中心にある鴨池は県下有数のカモ類の飛来地であり、また、日本最南端のコハクチョウの越冬地としても有名です。

鴨池公園の生き物

鴨池公園へは池沼性のネクイハムシ、中でもスイレン科のスイレンやヒツジグサを食草とするガガブタネクイハムシが生息しているのではないかと何度か訪れたのですが、残念ながら未だ発見するには至っていません。ガガブタネクイハムシは名前からミツガシワ科のガガブタを食草としているように思われますが、実際にガガブタを食草としているのはよく似たイネネクイハムシです。イネネクイハムシはスイレン科のハスやジュンサイに多く、ミツガシワ科のガガブタ、アサザやヒシ科のヒシなどの浮葉で見られますが、浮葉の無いイネでは見られません。古い文献にはイネの害虫として記載されたものもありますが、農業改良普及センターの友人もそんな話は聞いたことがないと言っています。どうしてこんな名前がつけられたのか不思議なことです。それはさておき、ガガブタネクイハムシ探索で何度か訪れるうち、この地の一部に、近年姿を消しつつあるいくつかの動植物が残っていることがわかってきました。一方、ヌートリア、ブラックバス、ブルーギルなどの特定外来生物をはじめ、キショウブなど在来種を脅かす帰化植物も多く見られます。カモ類が北へ帰ったあとの春にはコバノミツバツツジ、ヤマツツジ、モチツツジなどのツツジ類が次々と咲き、マルバアオダモやコバノガマズミの白い花も目立ちます。夏になると、手入れのされていない林内にサルノコシカケやカワラタケなどが生えた立枯や切株が目立つようになります。これらのキノコは木材腐朽菌と呼ばれ、木材の分解に重要な役割を果たしています。木材腐朽菌の存在が無ければ、枯れた樹木は朽ちることなく、林の中は枯木で埋もれてしまうことでしょう。さらに、この腐朽菌にはオオキノコムシやゴミムシダマシの仲間が見られ、幼虫が朽木を食べるハナムグリやクワガタムシも産卵のため集まってきます。秋にはフジバカマ以外の秋の七草やリンドウ、ワレモコウなどが咲き、昆虫ではウラギンスジヒョウモン、オオキトンボ、ナニワトンボ、カヤコオロギなどの絶滅危惧種も見られます。これらが姿を消す頃には数千羽のカモが北からやってきます。

ハルゼミ
（兵庫県版RDB2012　要注目）

５月に現れ近くにいる数頭で合唱する。アカマツの梢にいることが多いがマツクイムシ被害でマツが枯れ、各地で減少している。

ジムグリ
（兵庫県版RDB2003　要注目）

無毒でおとなしく、赤いマダラ模様が美しい。地下のネズミ穴に潜り込み、子供を好んで捕食するらしい。

ウラギンスジヒョウモン
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

かっては県内に広く分布していたが、現在では東播磨のため池周辺でしか見られない。春はアザミ類、秋はサワヒヨドリの花によく集まる。

オミナエシ

秋になるとカキランと入れ替わるように花を咲かせる。白い花のオトコエシも見られる。

リンドウ

古い放棄田や畦畔に見られる。

シルビアシジミ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

マメ科のミヤコグサやコマツナギを食草としている。カタバミを食べるヤマトシジミとよく似ており当地では混生している。

メスグロヒョウモン

オスは他のヒョウモン類と同じような模様をしているが、メスは写真のように黒く別種のように見える。ため池周辺でよく見られる。

カキラン
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

初夏に池の堤や畦畔に群生する。大型のラン科植物がこれほど見られるのは珍しい。

クサガメ

豊臣秀吉が朝鮮半島から持ち帰ったのが始まりの外来生物と言われている。原産地の朝鮮半島や中国では絶滅危惧種となっているらしい。ペットショップなどで売られているゼニガメは本種の子供である。

ヨツスジハナカミキリ

もともと山地に多い種であるが、主に枯れた針葉樹に産卵するため、低山でもよく見かけるようになった。写真はマツクイムシ被害木の切株に産卵しているところ。

イシモチソウ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

日当たりの良い池畔や山道の水が滲出した場所に見られる。東播磨のため池周辺ではよく見かけるが、当地には少ない。

トウカイコモウセンゴケ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

イシモチソウと同様の場所に見られ、初夏にピンクの小さな花を咲かせる。名前のとおり地面が赤く見える。よく似たモウセンゴケはやや標高の高いところに生育し、白い花をつける。

ホソナガニジゴミムシダマシ

カワラタケなどのキノコが生えた朽木に集まる。名前のイメージと違って、虹色の輝きがあり美しい。

4

かわい快適の森を歩く

「かわい快適の森」の概要

「かわい快適の森」は加西市、加東市、小野市の３市に及ぶ広大な青野ヶ原台地の東端に位置し、小野市新部町から河合中町に至る地域です。青野ヶ原台地の大部分は自衛隊の演習場となっており、勝手に立ち入ることはできませんが、そのおかげで、豊かな自然環境が今でも残されています。

民有地との境界に沿うように南の「夢の森公園」から北の「八ヶ池森林公園」まで４㎞ほどのハイキングコースが整備されています。尾根や谷を渡り歩く起伏に富んだコースで、雑木林や湿地、ため池が点在し、かっての東播磨の里山を想起させる場所です。

「かわい快適の森」の生き物

青野ヶ原台地は湿地に生息する生き物の宝庫としてその名を知られています。全国的に絶滅が心配されるベッコウトンボやマダラナニワトンボ、近畿では兵庫県の一部の地域にしか残っていないヒメヒカゲなども、かっては普通に見られたそうです。そのような種類の中に、アオノネクイハムシというコウチュウ目ハムシ科の昆虫がいます。アオノネクイハムシはここ青野ヶ原の演習場内にある池から1980年に多数採集され、国内では未知の種ということで、アオノネクイハムシと命名されました。当時は今と違い、割と自由に演習場内に入ることができたらしく、毎年調査が行われていたそうですが、1986年以降、忽然と姿を消し、現在まで再発見されたという報告はありません。今は兵庫県版RDB2012ではＡランク、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類にランクされているものの、国内ではいずれ絶滅種となる可能性が高いようです。このアオノネクイハムシをはじめ、青野ヶ原台地の生物相の一端でも知りたいと思えば「かわい快適の森」は最良の場所と言えるでしょう。湿地やため池の流入口付近にはハンノキ林が発達し、サワギキョウやキセルアザミ、トキソウ、トウカイコモウセンゴケなど低標高地の湿地を代表する植物が見られます。ここでも、ため池ではウシガエルやブルーギルなどの外来種ばかり目立ちますが、定番の一つであるミシシッピアカミミガメは今のところ見られません。ハイキングコース沿いにはコナラやアベマキの林があり、これらの樹木から出る樹液にはカブトムシやクワガタムシ、ハナムグリ、スズメバチ、チョウなどの多様な昆虫類が集まっています。カナブン、シロテンハナムグリ、シラホシハナムグリ、キョウトアオハナムグリなどが樹液に群がる様は、他の場所ではなかなか見ることのできない光景です。

今回は主に湿地やコナラ、アベマキ林で見られる生き物を紹介します。

サワギキョウ

ため池の流入部などに見られる。有毒植物で横溝正史の小説「悪魔の手毬唄」に出てくる「お庄屋ごろし」とは本種のことと言われているが、実際にはそれほどの効力は無いらしい。

ニホンイシガメ

純粋な日本在来のカメではあるが、クサガメやミシシッピアカミミガメに脅かされ、今では絶滅が危惧されている。写真は湿地で見られた孵化後間もない子ガメである。

サラサヤンマ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

林の中にポッカリ空いた空間をパトロール飛行している。飛び続けるので撮影が難しい。幼虫は浅い水たまりの落ち葉の下などにいるらしいが、詳しいことはわかっていない。

キセルアザミ

湿地のハンノキ林の下などに見られる。花がキセルの雁首のように垂れることから、この名がつけられた。

ヒメアカネ
（兵庫県版RDB2012　要注目）

湿地に生息するアカトンボで、湿地の減少とともに生息地も少なくなっている。

ヒメカンアオイ

カンアオイ類は徳川家の葵の御紋や蝸牛媒花(カタツムリによる受粉)、ギフチョウの食草としても有名であるが、ここではギフチョウは見られない。

ツクバネウツギ

生垣や道路の分離帯などに植栽されているアベリアと同じ仲間で、樹林下の道の脇などでよく見られる。

クルマバッタ

ため池の堤などで見られるが、良く似たトノサマバッタやクルマバッタモドキよりは少ない。飛んだ時に後翅の黒い半円模様がよく目立つ。

タマムシ

里山に多いが、エノキやセンダンの樹冠を飛んでいることが多く、見つけるのは難しい。写真はソヨゴの立枯れに産卵のため飛来したところ。

マンネンタケ

乾燥したものは霊芝と呼ばれ、薬用に用いられる。幻のキノコのように言われるが、実際は広葉樹の切株などでよく見られる。

ハチタケ?

冬虫夏草と呼ばれるキノコの一種で、毎年同じ場所で寄生されたスズメバチが見つかる。

ニホンアカガエル
（兵庫県版RDB2003　Cランク）

湿った林の下でよく見かけるが、水辺ではほとんど見られない。よく似たヤマアカガエルは標高の高いところに多い。

キョウトアオハナムグリ
（兵庫県版RDB2012　要注目）

京都の名がついているが、最初に記録されたためで、実際は大阪湾沿いの沿岸部に多い。内陸部では少ないが、ここでは普通に見られる。

カブトムシ

雑木林の人気者であるが、最近は少なくなった。夜行性のため昼間に見かけるのは珍しい。

ネブトクワガタ

一見オオクワガタのように見えるが、実際はずっと小さい。アベマキの樹液にきたところ。

ミヤマクワガタ

東播磨の里山ではコナラやアベマキの樹液でよく見られる。カブトムシがいなくなると上から降りてきた。

5

谷池を歩く

谷池の概要

兵庫県内には少なくなったとは言うものの４万以上のため池があり、淡路島や東播磨で特に多くみられます。この数は全国一で２位の広島県の２倍以上あります。ため池は大きく谷池と皿池の２種類に分けられます。谷池は谷の下流側に堤を作り川をせき止めて作られた池で、山間部で多く見られます。一方、皿池は平野部に多く周囲を堤で囲み底を掘り下げて作られた池で、川やダムから用水路を経て水が貯えられています。このことから、両者には周囲の環境や水質に大きな違いが見られ、生息する生物相も異なります。谷池の多くは周囲を樹木で覆われ、水質は貧栄養の場合が多く水生植物もあまり見られません。逆に皿池は富栄養で浅いため、自然状態では水生植物が多く繁茂します。

谷地の生き物

加西市の北部に普光寺というお寺があります。周辺は照葉樹林に生息するヒメハルゼミやモリアオガエルの生息地として知られ、「河内ふれあいの森」としてハイキングコースも整備されています。ここには谷池と呼ばれるため池が点在し、多くのアカトンボが生息しています。今回は秋の谷池めぐりで見られるトンボを中心に紹介したいと思います。

アカトンボとは正式な名前ではないため、ショウジョウトンボやウスバキトンボなどを含めた赤くなる種を指すこともありますが、一般にはトンボ科アカネ属に属する種類をアカトンボと総称しています。このため、青くなるナニワトンボや黄色くなるキトンボやオオキトンボもアカトンボに含まれます。アカトンボは一部の種類を除き、ため池や水田の水量の変化に対応した生活史を持ち、日本の農耕文化と深く係わることで繁栄してきました。初夏に羽化したアカトンボは、黄色っぽい色をして赤くありません。羽化後は近くの森の中などへ移動し、十分栄養を蓄え成熟するのを待ちます。中でもアキアカネは高地へ移動するため、氷ノ山山頂などで見られるトンボの大群は赤くはありませんがアキアカネです。成熟し赤くなると生まれ故郷の池や水田に現れ、ここで、交尾、産卵を行います。アカトンボは種類によりそれぞれ好みの池が違い、秋に完全に水を抜いてしまう池、少し水を残している池などに多いようです。

水抜きされたため池

ため池は維持管理のため秋になると水抜きされることが多い。完全に水抜きすることによって天敵であるブラックバス、ブルーギル、ミシシッピアカミミガメなどの外来生物も駆除することができるが、アカトンボ以外のトンボは少ない。

ナニワトンボ（兵庫県版RDB2012　Cランク）

ナニワの名前がつくが兵庫県の播磨地方に多く他府県では絶滅が心配されている。青いアカトンボとして有名で水の無い地表に産卵する。卵は水に浸かると溺れ死ぬと言われ水抜きされた池には特に多い。

リスアカネ

ナニワトンボと同じく水抜きされた池に多い。同様に羽先が黒いコノシメトンボは全身が赤くなりノシメトンボはあまり赤くならない。

水が残され汀（みぎわ）のあるため池

一つの池で多様な環境が得られるため、生息するトンボの種類も多い。

ウラギンシジミ

水抜きされた池で吸水していることが多い。羽の裏は白一色であるが、オスの表は黒地に赤茶色、メスの表は黒地に銀色の模様がある。幼虫はクズなどのマメ科植物を食べる。

キトンボ

オスとメスが同じオレンジ色をした美しいアカトンボで羽の一部が透明となる。水と地面の境付近に産卵するため条件に合う池でしか見られない。

オオチャバネセセリ

谷池の堤などで良く見られるが数は多くない。よく似たイチモンジセセリとは後翅の銀色紋の並び方で区別できる。

オナガササキリ

池畔の丈の高い草本上で見られる。メスの産卵管が体長と同じくらい長い。

秋でも満水のため池

一年中水をたたえているため水深が深くアカトンボは少ない。

オオルリボシヤンマ

黒地に水色模様のある美しいトンボで谷池でよく見られる。水生植物の茎や水に浮いた枯木などに産卵する。

オオアオイトトンボ

普段は森の中で生活しているが、秋になるとため池に現れ水面を覆う樹木の枝に産卵する。孵化した幼虫は自力で水面に落ちる。

マユタテアカネ

顔面に舞子さんの眉のような黒い模様がある小型のアカトンボでメスの羽先は黒い。産卵する池をあまり選ばないため広く見られる。

ニホンジカ

シカ防護柵の網にからまれ身動きできなくなっている。つい20年ほど前まではこの地で見かけることは無かったが、今では水抜きされたため池の地面に多くの足跡が見られる。

ネキトンボ

高い竿や樹木の先端に止まる習性があるので目につきにくい。羽の基部がオレンジ色になるのでこの名がある。オスは秋になると全身真っ赤になる。

オオキトンボ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

羽全体が黄色くなる日本で唯一のアカトンボで、池畔より少し離れた場所で見られることが多い。産卵は水抜きされた地表に行われるらしい。

ハラビロカマキリ

秋になると山間の池に浮いているカマキリがよく見られる。これは寄生したハリガネムシ（類線形動物）に操られたもので、成虫となったハリガネムシはこうして水中に脱出する。水中に産まれたハリガネムシの卵は水生昆虫の幼虫のエラに吸い込まれ、羽化した水生昆虫がカマキリなどの陸上昆虫に食べられるという不思議な生活史をたどる。

6

皿池を歩く

皿池の概要

前回でも述べましたが、兵庫県内には少なくなったとは言うものの全国一の４万余りのため池があり、淡路島や東播磨に多くみられます。皿池は平野部に多く周囲を堤で囲み底を掘り下げて造られた池で、川やダムから用水路を経て水が貯えられています。一般に谷池より規模が大きく、県下最大の稲美町加古大池、最古の稲美町天満大池も皿池に分類されます。また、周囲をコンクリートで固められ、植物がほとんど無い池も多く、このようなところでは生き物の姿もあまり見られません。散策道が整備されている池も多く、ため池めぐりのハイキングコースが整備されているところもあります。ただ、夏の炎天下では日陰も少なくあまり奨められません。

皿池の生き物

広大な播磨平野を中心とした兵庫県の瀬戸内海を囲む地域は瀬戸内気候と言われる温暖で雨の少ない地域です。このため古くより農業潅漑用水として多くのため池が造られています。前回は谷池と呼ばれる山間部で多く見られるため池の生き物を紹介しましたが、今回は皿池と呼ばれる平野部に存在する池に生息する生き物を紹介します。

外来種の定義は様々な説がありますが、一般には明治時代以降に人為的に国内に持ち込まれ、自力で繁殖し、世代を繰り返している生物のことを言います。このため、温暖化等により人為に頼らず分布を広げている鳥や蝶などは外来種とは言いません。また、モンシロチョウやクサガメなど、江戸時代以前に外国から持ち込まれたと思われる生物も外来種に含めないのが一般的です。現在の皿池とその周辺で見られる草本植物の大半は外来種で占められ、ブタナ、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオンなどは特に目立ちます。私が子供の頃、近くのため池や小川にタモ網を持って出かけると、網の中にはメダカやフナ、ゲンゴロウ、ミズスマシ、タイコウチ、ヤゴ、アメリカザリガニなどがごく普通に入っていました。しかし、50年後の今、同じことをしてもこれらの生き物はほとんど入りません。外来種のアメリカザリガニさえも減っているように思います。池の中は外見ではなかなかわかりませんが、目につくのはミシシッピアカミミガメ、ウシガエル、ブラックバス、ブルーギルなど外来種ばかりです。唯一、紅白や金色のものが混ざっているもののコイはよく見かけるようになりました。さて、50年後はどうなっているのでしょうか、興味はありますが私は見ることができません。

今回は外来種を中心に紹介します。

加古大池

県下最大のため池である稲美町の加古大池には様々な環境が見られ、散策コースも整備されているため、手軽に自然観察ができる場所となっている。

ウシガエル（特定外来生物）

食用ガエルとも言い、食用として輸入養殖されていたものが逸出したと言われている。動くものは何でも食べるが、各地の池にブラックバスが放流されてからは、かってほど見かけなくなった。

ヌートリア（特定外来生物）

加古川水系のため池には普通に生息している。人の気配を感じると警戒してすぐに隠れるが、餌付けされているのか人をあまり警戒しない個体がいる池もある。有害鳥獣駆除のための箱ワナが設置されている池も多い。

オオクチバス（特定外来生物）

一般にはブラックバスの名前で知られている。写真は幼魚で、この頃はカムルチー（別名ライギョ・要注意外来生物）の幼魚やブルーギルと小さな群れを作って水面付近を泳いでいる。次種のブルーギルとともに在来種の生息にとって最大の脅威となっている。

ブルーギル（特定外来生物）

写真の円形部分は本種の産卵床で池畔の浅いところに作られる。オスが直径15cmほどのすり鉢状の床を掘り、メスを招き入れ産卵させる。オスは孵化するまで卵を外敵から守る。雑食性で魚卵、水生昆虫など何でも食べ、前種とともに生態系に大きな影響を及ぼしている。

ツマグロヒョウモン

南方系の種で温暖化に伴い急激に分布を広げ、ため池周辺の農耕地や堤に多い。幼虫はスミレの仲間を食べ、園芸種のパンジーを特に好む。ツマグロ部分があるのはメスだけでオスには無い。

タイワンウチワヤンマ

南方系の種で、兵庫県の本州部では30年ほど前に明石市で最初に確認され、現在では瀬戸内側一帯に広く分布している。元から生息していたウチワヤンマが減少傾向なのに対し、本種は増加している。

ミシシッピアカミミガメ（要注意外来生物）

ペットとして飼われていたミドリガメが大きくなったもので、今やため池のカメと言えば本種のこととなっているほど数は多い。在来種のクサガメははるかに少なく、イシガメに至っては絶滅が危惧されている。気性が荒いわりには草食傾向が強い。

スクミリンゴガイ（要注意外来生物）

写真は池畔の植物に産みつけられた卵塊で、ジャンボタニシとも言われている。食用として導入し養殖されていたものが、法律が改正されたことにより野外に遺棄され全国に広がった。水稲への食害が報告されており、分布の拡大が懸念されている。

オオマリコケムシ

アメリカ原産の外来生物で兵庫県では1990年代に発見され、今では各地のため池で見られるようになった。ムシの名がついているが、昆虫ではなく外肛動物に属している。小さな個虫が集まって寒天物質を出し、群体と呼ばれる一つの塊を形成している。卵が水鳥の足について分布を広げると言われる。

アオサギ(右)とコサギ(左)

サギ類はため池の浅瀬でよく見られる。アオサギ、ダイサギは以前より増えているように思えるが、逆にコサギは少なくなった。オレンジ色のアマサギは周辺の田んぼに多い。

ブタナ（要注意外来生物）

一見背の高いタンポポのようで、春に農耕地や池の堤を一面黄色く染めているのは本種の場合が多い。春だけではなく少ないながら秋まで見られる。

カルガモ

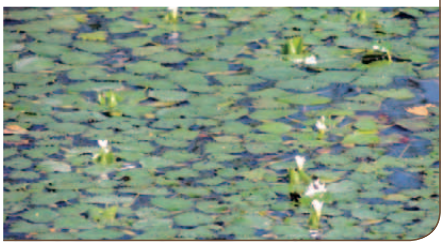
多くのカモ類は冬にシベリアなどから渡ってくるが、近年、本種の一部が春になっても帰らず、留まって繁殖をしていることが報告されている。当地でも雛を連れた本種をよく見かけるようになった。

ガガブタ

池干しなど、昔からの農村文化に適応した水生植物と言われているが、近年の農業形態の変化により生育する池が減っている。独特な名前と花の形からいつまでも残ってほしい植物である。

ヒシ

夏から秋にかけて水面を覆うように繁茂し、冬には大量の実が水際に打ち上げられる。実は食用にされるが、鋭い棘があり刺さるとなかなか取れない。草食性の強いアメリカザリガニが減ってヒシが増えたという話もある。



キショウブ（要注意外来生物）

1980年代に日本に導入された本種は、花が美しいことなどから大切にされ、在来のアヤメ属植物が相次いで絶滅危惧種となる中、瞬く間に全国に広がった。湿地や池畔に繁茂し、生命力が強く根絶が難しいため今でも勢力を拡大している。

7

神鍋山の噴火口跡を歩く

神鍋山の概要

日本海に面する豊岡市日高町にはスキーで有名な神鍋高原があります。ここには約２万５千年前に爆発したとされる、近畿で唯一ともいえる火山の噴火口跡があります。周囲750m、深さ40mの巨大なすり鉢状の地形は、現在はススキ草原となっていて草原性の生き物の恰好の生息地となっています。また、周囲三方は樹木に覆われ、ここにも様々な生き物が生息しています。

神鍋山の生き物

とある６月の某日、かねてより望んでいたこの噴火口を訪ねる機会がありました。梅雨の合間ということもあり、曇りがちでチョウなどの飛ぶ姿はあまり見られません。スキー場のはずれから噴火口までは作業用の舗装された道が続いています。一般の車は入れませんのでここを歩いて登ることにしました。噴火口までは樹木に覆われ見晴らしは良くありませんが、道路脇の日当たりの良いところにはササユリやホタルブクロ、ウツボグサなどが咲き、立ち枯れにはサルノコシカケなどのキノコも見られます。登り詰めると眼下に巨大な噴火口が広がり、周回できるように道がついています。また、噴火口の東側は樹木が無く、スキー場とその先の雄大な景観を楽しむことができました。この周回路は森林と草原との境を歩くため、多様な生き物を見ることができます。ゼフィルスと総称され、チョウの愛好家に人気のある大型のシジミチョウの仲間もこの日は３種類見ることができました。ヤマツツジ、ヤマボウシ、クリなどの樹木が花を咲かせ、緑一色の中で赤や白のアクセントとなっています。少し気になったのはオオキンケイギクやアラゲハンゴンソウといったキク科の外来植物が見られたことです。ここまで広がっているのかとの思いですが、在来種の生存を脅かす存在であっても、見栄えが良く美しいものには人は寛容なのだなとも思いました。一周したところで、何とかもっていた天気も崩れ始め早々に噴火口を後にしました。この日は天候などの関係もあり、草原性のものはあまり見かけませんでしたが、秋の天気の良い日にぜひもう一度訪ねてみたいと思わせる場所でした。

噴火口跡

近畿で最も新しく、かつ、目で見て分かる唯一のものと言われている。ここに降った雨がどこをどう流れ、どこに流れ出ているのか興味は尽きない。中へ降りることもできる。

コフキサルノコシカケ?

コフキサルノコシカケと呼ばれていたものは、現在、都市部の公園などに見られるオオミノコフキタケとの２種に分けられている。どちらも木材腐朽菌として森林の生態系の中で重要な役割を果たしている。

ホタルブクロ

名前は子供がホタルを花の中に入れて楽しんだことに由来する。個体により赤紫や白色の花が咲くが、ここではすべて白色であった。

ササユリ

林内に光が当たることにより花を咲かせる。生長が遅く、発芽から開花まで10年かかると言われている。県内に広く分布しているが、どこでも減少傾向にある。

キイロクチキムシ

クリやノアザミの花で見られた。美しい色や花に集まることなど、朽木や葉上で見られる他のクチキムシ類とは異なる習性を持っている。

オオシロオビゾウムシ

ゾウムシの仲間は口がゾウの鼻のように長く伸びている種類が多い。ワラビ類を食べる珍しいゾウムシであるが、運よくススキの葉に止まっているところを撮影した。

ハネナガフキバッタ

フキバッタの仲間は森林に生息し、翅が短く飛べないため、生息地が隔絶され多くの種類に分かれている。唯一長い翅を持っている本種はよく飛び全国に広く分布している。

ジョウザンミドリシジミ

ゼフィルスの多くはオスが金属光沢のある緑色の翅を持っている。この仲間は数種類が同じ森の空間で縄張り争いをするが、早朝、夕方など活動時間で棲み分けをしている。

ナナフシ

テレビ番組や図鑑で有名なナナフシは森の中で見られるが、植物の茎や小枝に擬態しているためか気付かない人が多い。見つかるのはすべてメスで単為生殖で卵を産むためオスを必要としない。

ミズイロオナガシジミ

平地性のゼフィルスで幼虫はクヌギやコナラの若葉を食べる。同じゼフィルスでもミドリシジミ類とは違い縄張り争いはしない。このためか、翅の表は地味な黒っぽい色をしている。

キマダラルリツバメ
（兵庫県版RDB2012　Bランク）

尾状突起が４本あること、古木に営巣するシリアゲアリに養育されることなど、極めて特異な形態と生態を併せ持ったシジミチョウである。かっては極めて限られた地域からしか記録がなかったが、現在では多くの生息地が知られている。

スジグロシロチョウ

モンシロチョウによく似ているがやや大型で森林に多い。翅脈に沿って黒い筋があるのでモンシロチョウと見分けるのは簡単であるが、近縁のヤマトスジグロシロチョウと見分けるのは非常に難しい。

ヤマボウシ

庭園などに植えられるハナミズキに近い日本の在来種で、白い花弁状の総苞の中心に黄色い花が数十個集まっている。秋になるとイチゴのように赤く熟し、甘酸っぱく美味しい。

ヤマツツジ

初夏に咲く森林性のツツジで、ツツジ自体は普通に見られるが、朱赤色の花は森の中では非常に目をひく。

オオキンケイギク（特定外来生物）

園芸用やグランドカバーとして移入されたが、他の植物を駆逐する強い生命力を持ち瞬く間に全国に広がった。今では海岸から山の上まで至る所で見られる。

アラゲハンゴンソウ

特定外来生物に指定されているオオハンゴンソウに近い種類で、兵庫県ではこちらのほうが多いように思う。オオハンゴンソウは自然度の高い環境に侵入し、大群落を形成して大きな問題となっている。

8

峰山高原を歩く

峰山高原の概要

峰山高原は兵庫県の中央を流れ瀬戸内海に注ぐ市川の上流部、標高900mに位置する高原で、ススキやササ草原の中に湿地や森林が点在し、変化に富んだ自然環境を楽しむことができます。最高峰の暁晴山（1077m）には電波塔が林立し、施設管理のための舗装された道が山頂まで整備されているものの、車の侵入は制限されています。近年は高原入口にリゾートホテルが建設され、周辺にはレジャー施設が整備されるなど、昔とは大きく様変わりした部分もあります。また、兵庫県でも有数のシカの生息地でその影響も大きなものがあります。

峰山高原の生き物

峰山高原を散策するのに一番良い季節は５月下旬から６月にかけてでしょう。先ずは入口からキャンプ場経由で山頂を目指します。キャンプ場に近づき両側が明るく開けてくるとカマツカの白い花や木の実のようなサラサドウダンの花が目につきます。また、タニウツギ、ヤブウツギ、ニシキウツギなどの背の高いウツギ類が多いのも特徴です。キャンプ場向いのササ原はかって背丈ほどのササが生い茂り中へ入るのも困難でしたが、現在はシカにすっかり食べ尽くされ、ササ原であったことがわからないほどになってしまいました。この辺から小さな湿地が至るところで見られるようになりますが、湿地を特徴づけるような動植物があまり見られないのは残念です。ヤブデマリの白い花が満開のいくつかの湿地を通り過ぎ、暁晴山山頂に至る道にはセンブリの花があちこちに咲いていましたが、今は少なくなってしまいました。山頂付近のススキ草原はササ原と違ってシカの食害は見られません。本誌にシカの食害をレポートされている近藤伸一さんによると、嗜好の順位の差であって食べないわけではないそうです。山頂で360度の展望を楽しんだ後、ホテル近くのリラクシアの森を歩いてみます。コナラやミズナラ等の落葉樹の森ですが、鬱蒼として暗く、林床には落葉が厚く堆積しています。下草や下層木もあまり見られません。渓流沿いにシカの食害を受けないクリンソウが小さな群落を作っています。ただ、白花が多く何となく違和感があります。森の奥深くにフェンスで囲まれた湿地がありますが、ノハナショウブなどの貴重な湿地植生を保護するために設置されたもので中に入ることはできません。以前は、このような湿地が高原のあちこちで見られたのでしょう。昔の面影はありませんが、それでも峰山高原には他では見られない貴重な自然が残っています。また、四季折々に違った面も見せてくれます。今回はその一端でも紹介できたらと思います。

ニホンジカ

１頭のメスがこちらを見張っている。レンズの向きを変えると鋭い鳴き声と共に数頭が逃げていった。

ススキ草原

秋になると山頂一帯が銀色の波に覆われ、素晴らしい景観を楽しむことができる。

クリンソウ（兵庫県版RDB2010　Bランク）

シカの不嗜好植物であることから県内各地で群落の拡大が報告されている。通常は紅紫色だがここでは白花が多い。

フタリシズカ

花穂は通常２個でこの名があるが、１個や３個の場合もある。林床にこれしか見られない場所もありシカの不嗜好植物かもしれない。

シモツケ（兵庫県版RDB2010　Bランク）

バラ科の落葉低木で古くから鑑賞用に栽培されている。県内の分布は限られており自生かどうかは不明である。

カワラナデシコ

秋の七草の一種であるが実際には６月頃から咲いている。通常はピンク色の花を咲かすが稀に白花も見られる。

センブリ

日当たりの良い登山道脇などに生育し、漢方で健胃剤として使われる。近年、減少傾向にありシカの食害を受けている可能性が高い。シカも胃薬にしているのだろうか。

ヤマカガシ

以前は無毒のヘビと思われていたが、ウミヘビと同じように牙ではなく奥の歯に毒腺を持つことが判明している。性格は温和でいじめない限り噛まれることはない。写真は30cmほどの幼体で側溝から抜け出せないでいた。

サラサドウダン
（兵庫県版RDB2010　Bランク）

播磨北西部の高標高地に多く兵庫県は分布の西限に当たる。日当たりの良い枝に釣鐘形の花をたわわにつける。

タニウツギ

県内の山地に普通に見られピンクの花を咲かせる。白花の株も混じるが同種かどうかは不明である。

ニシキウツギ
（兵庫県版RDB2010　Cランク）

２色の花をつけるのでこの名があるが、最初から２色ではなく咲き始めは白色で徐々にピンク色に変化していく。

ヤブウツギ

タニウツギによく似ているが、より濃い赤色の花をつける。主に太平洋側に分布し、本種とタニウツギ、ニシキウツギが混生するのは珍しい。

モリアオガエル卵嚢
（兵庫県版RDB2003　Bランク）

人工池の上のアカマツの枝に下がる卵嚢、適当な枝が無いところでは水際の植物やコンクリート壁面にも産卵する。

フトヒルムシロ

ヒルの多い池に生育し、ヒルが葉の上で休むという意味で名づけられた。水中にある沈水葉と水面にある浮葉を持ち、水生植物の乏しい山間の池に生息する生き物にとって貴重な場所を提供している。

シュレーゲルアオガエル卵嚢
（兵庫県版RDB2003　Cランク）

湿地のミズゴケの中に産み込まれていたものを撮影のため取り出した。高標高地のため本種のものかどうか疑問が残るが、モリアオガエルの卵嚢とは明らかに違う。

ミヤマカラスアゲハ

アゲハチョウの仲間にしては珍しい北方系の種類で山地に多い。日本で一番美しいチョウという人もいる。幼虫は漢方胃腸薬で有名な陀羅尼助丸の原料となるミカン科のキハダを食べる。

9

あわじ花さじきとその周辺を歩く

あわじ花さじき周辺の概要

淡路島北部には花と緑をテーマにした公園が数多くあります。その多くは自然の地形と景観を生かした独自のもので、特に、淡路島公園、あわじ花さじき、淡路景観園芸学校等は島の脊梁部を走る１本の道で繋がっています。花さじき周辺は瀬戸内海側と大阪湾側を分ける脊梁部にありながら、広い台地状の地形となっていることから、古くから開発が進み、森林だけでなくため池や農地、牧場などが点在する多様性に富んだ地域となっています。また、瀬戸内海を望む城ノ瀬山、大阪湾を望むあわじ花さじき、中間にある明石海峡大橋の橋脚がいずれも海面から約300mの高さであることも興味をそそられるところです。

花さじき周辺の生き物

淡路島は本州と四国を結ぶ位置にありますが、生物相から見ると南部の諭鶴羽山系は四国との繋がりが深いように思われます。逆に北部は本州側とよく似た植生で、高い山もなく、一般にあまり興味をそそられる場所ではありません。しかし、淡路島南部や県内各地で植生破壊をもたらしているニホンジカが生息せず、大規模な開発行為も行われていないことから、昔からの生物相が今も残る地域ともいえます。ただ、生息していないはずのイノシシに代わり、牧場から逃走したか放獣されたか定かではありませんが、イノブタと思われる獣が爆発的に増殖し農業上の大きな問題となっています。ノウサギもよく見かけますが、こちらは大きな問題とはなっていません。この地域は位置的なことから、生物の渡りを比較的容易に観察できる場所でもあります。真っ青な秋空に数十羽の猛禽類（ワシやタカの仲間）が円を描きながら小さくなるまで上がっていくのを見たことがありました。ヒヨドリバナの群落に無数のアサギマダラが集まっている場所もあります。点在する小さな池の中には、写真を撮ることができなかったものの、数十羽のオシドリが見られる池、筆者がトンボの中で一番美しいと思うアオヤンマが生息する池もあります。また、花や緑の景観をテーマにした公園が多くあることから、植栽された花や樹木を訪れる鳥や昆虫を観察する機会も多くあります。

今回は植物の展示施設が多いので、身近に生息しているにも関わらず、なかなか見ることのできない生き物（動物）を中心に紹介します。

ヒヨドリバナの群落

城ノ瀬山山頂にある電波塔の敷地内にあるためフェンス越しとなるが、渡り途中のアサギマダラなど多くの昆虫が見られる。

イシガケチョウ

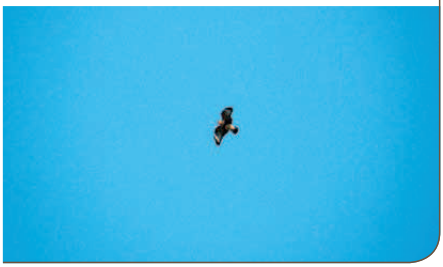
展翅標本のように翅を水平に広げて止まる。植栽されたフジバカマには本種やアサギマダラなど多くのチョウが集まる。

アサギマダラ

秋に越冬のため南方へ渡っていく。兵庫県でマーキングされたものが南西諸島で発見されている。他県でマーキングされたものが台湾で捕獲された例もある。

ノスリ（兵庫県版RDB2003　Cランク）

開けた農地などの上を飛翔している。トビより小さくホバリングをしながら滑るように飛ぶのでわかりやすい。



ニホンイシガメ

本土側では絶滅が危惧されるほど減少しているが、淡路島では比較的目にすることができる。

ハネナシコロギス

コオロギとキリギリスの中間のような形態をしているのでこの名がある。葉を糸で綴ってその中に潜む習性があり夜間活動する。

ヨツボシトンボ
（兵庫県版RDB2012　要注目種）

古いタイプの池に多いと言われ、本土側では減少傾向にあるが、淡路島北部では比較的よく見られる。近縁のベッコウトンボは県内では絶滅したと言われている。

カトリヤンマ
（兵庫県版RDB2012　Cランク）

夕方薄暗くなると餌を求めて上へ下へとアクロバット飛行していた姿が懐かしい。秋になると日中池の上をホバリングしているオスが見られるようになる。

ヤブヤンマ

樹木に覆われた薄暗い池に多い。水中ではなく池畔の朽木などに産卵する。写真はコンクリートに産卵を試みているところ。（結局あきらめた）

ヒメクロゴキブリ

樹上で生活する小型のゴキブリで、屋内に侵入することはない。庭や神社など身近にいるにもかかわらず見かけることは少ない。

ゴマダラカミキリ

様々な広葉樹の樹皮を食べる大型のカミキリムシで、最近は従来の生息地より住宅地や公園などのほうが多く見られるようになっている。

ウラゴマダラシジミ
（兵庫県版RDB2012　要注目種）

ゼフィルスと呼ばれる大型のシジミチョウの仲間で、青白色の翅はたいへん美しいがなかなか開いて止まらない。花壇を訪れることもある。

ノコギリクワガタ

子供たちにも人気の大型のクワガタムシで、植栽された外国産の樹木（写真：サトウカエデ）でも見られる。本土側でよく見られるミヤマクワガタは淡路島には分布していない。

シュレーゲルアオガエル
（兵庫県版RDB2003　Cランク）

水田やため池の周辺で見られ土中に白い泡状の卵塊を産む。モリアオガエルとは眼の虹彩の色で区別できる。（本種は金色、モリアオガエルは赤っぽい）

ホシミスジ

兵庫県内ではシモツケ類を食べる稀なチョウだったが、今ではユキヤナギやコデマリなどが植栽された市街地や公園で普通に見られるようになった。

ムネアカセンチコガネ

いわゆる糞虫の仲間なのに糞に集まらず生態は謎に包まれていた。数年前、成虫、幼虫ともに地下生菌（高級食材のトリュフなど）を食べることが判明し注目を浴びている。

10

淡路島南部の諭鶴羽山系を歩く

諭鶴羽山系の概要

諭鶴羽山系は淡路島の南部に位置し、洲本市の柏原山（標高569m）から南あわじ市の淡路島最高峰である諭鶴羽山（標高608m）に至る地域です。どちらも山頂付近まで林道が開設され、気軽に登山、ハイキング等が楽しめるところです。本州部とのつながりが深い北部と違い、諭鶴羽山系は地質的にも生物的にも四国とのつながりが深く、兵庫県内ではここでしか見られない動植物も数多く存在します。

諭鶴羽山系の生き物

諭鶴羽山系にはニホンジカ（以降シカと略す）とイノシシの二種類の大型哺乳類が生息しています。いずれも、地元には様々な被害をもたらしていますが、特にシカによる食害は農業被害、生活被害のみならず、森林破壊をもたらし、山地崩壊などの災害につながる重要な問題だと考えています。ここでは諭鶴羽山系の貴重な動植物を紹介するのが目的でしたが、シカの食害により生態系が変化している現状も含めて紹介をします。今回は数年前に書いた原稿を基にしているため、現在の状況とは若干異なる面もあるかとは思いますが、兵庫県に生息する貴重な動植物にとって、外来生物だけでなく、シカによる食害が大きな脅威となっていることを考えていただければ幸いです。

諭鶴羽林道、柏原山林道を歩くと至る所でシカの姿と痕跡を目にすることができます。路肩の草は食べられ、維持管理のための草刈りは必要ありませんが、法面を含め崩壊の危険が感じられます。緑の山は一見すると何も変わりがないように見えますが、地表にある植物はシカが好まない限られた種類だけです。中層、高層には多様な樹木が生育しているにもかかわらず、後継となる稚樹や幼木は見られません。また、昔からこの地域は備長炭の生産のためウバメガシの伐採が行われていました。ところが、昭和50年代頃から備長炭の需要が増え、県内外の業者による大規模な伐採が行われるようになりました。原木用に地際から伐採されたウバメガシはすぐに萌芽枝を出し、数年もたつともとのウバメガシ林に戻ります。今はこの萌芽枝をシカが食べてしまい、繰り返し食べられることによって再生能力が失われ、その土地は裸地化してしまいます。現在は大規模な伐採は行われていませんが、一度裸地化したところを森林に戻すためには大変な努力が必要です。そのためには、特定外来生物で駆除が必要なナルトサワギクなどを活用することも考えていいのではないでしょうか。将来のことはわかりませんが、何とかシカによる森林破壊を食い止め、ここにしかない貴重な自然を後世に残したいものです。

アカガシ

諭鶴羽神社のスダジイ・アカガシ群落は兵庫県版RDB2010でBランクに指定されている。この群落内でも稚樹や幼木は見られない。

アカスジキンカメムシ

金属光沢のある緑色の地に赤い筋模様があり大変美しい。山頂付近でよく見られるがカメムシなので臭いはそれなりに…。

ヒメハルゼミ（羽化殻）
（兵庫県版RDB2012　要注目）

県内の照葉樹林に局地的に分布しているが諭鶴羽山には特に多い。ハルゼミの名があるが夏に出現し合唱する。

オンツツジ
（兵庫県版RDB2010　Bランク）

四国や九州に多いミツバツツジの仲間で県内では諭鶴羽山周辺のみで見られる。樹皮をシカに食べられているものが多く枯死が心配される。

ハンカイソウ

湿地のような環境に生育し柏原山山頂付近や林道周辺で見られる。どこででも見られる植物ではないがシカの不嗜好植物で年々群落の規模を大きくしている。

マルバウツギ

少し湿り気のある谷筋の林道脇などに見られる。生育ぶりからこれもシカの不嗜好植物かもしれない。

モチツツジ

崖地などシカの食害を受けない場所では大きな株となる。ピンクと緑のトンネルを通る気分で大変気持ちが良い。

ウリハダカエデ

カエデの仲間はシカの嗜好性が高く、稚樹や幼木は真っ先に食べられるが、本種だけは食害を受けない。このため、ここでは幼木も多く見られる。

シキミ

仏事に使われるため関西ではなじみ深く花も美しいが、有毒成分を含みシカはほとんど食べない。特に実に有毒成分が多く、シイの実と間違えて死亡事故も起きている。

ジャケツイバラ

名前のとおり鋭いトゲを持つが、バラ科ではなくマメ科の植物で荒地などに生育している。トゲのせいか有毒成分を含むのかわからないが、シカは好まないようである。

イワヒメワラビ

代表的なシカの不嗜好植物で、日当たりが良く水はけの良い緩斜面に群落を形成する。一般にシカはシダ植物をあまり好まないようである。

ミヤマカラスアゲハ

クロアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハなどの大型のアゲハチョウと共にハンカイソウの花を訪れていた。幼虫はミカン科のキハダを食べ淡路島では少ない。日本で最も美しい蝶という人もいる。

ナルトサワギク（特定外来生物）

キク科の帰化植物で、特定外来生物に指定され駆除の対象となっている。有毒成分を含むためシカが食べず裸地でも生育できるため諭鶴羽山では山頂付近まで見られる。別名をコウベギクと言うがこの名は兵庫県では使われない。

センチコガネ

動物の糞を食べるため、シカの多い諭鶴羽山系では普通に見ることができる。本州部では赤緑色をした大型のオオセンチコガネが多いが淡路島には分布しない。通常は銅褐色であるが淡路島では青黒色や漆黒色となり人気が高い。

ニホンジカ

諭鶴羽山系では平成になった頃から急激に増加し今では県下でも有数の生息密度となっている。人馴れして車の中にいる限り逃げようとしない。

崩壊が進むニホンジカによる食害跡地

地表にわずかに残る緑色部分は不嗜好植物であるイワヒメワラビ、ダンドボロギクなどで諭鶴羽山系では尾根筋を中心にあちこちで見られる光景である。

ひょうごの森と水辺の生き物を訪ねて【50音順索引】

動　物

ア　アオサギ　27
アカスジキンカメムシ　41
アサギマダラ　37
イシガケチョウ　37
ウシガエル　25
ウスバシロチョウ　7
ウラギンシジミ　21
ウラギンスジヒョウモン　13
ウラゴマダラシジミ　39
エゾハルゼミ　7
オオアオイトトンボ　22
オオキトンボ　23
オオクチバス　25
オオシロオビゾウムシ　29
オオチャバネセセリ　22
オオマリコケムシ　26
オオルリボシヤンマ　22
オナガササキリ　22
カ　カツラネクイハムシ　9
カトリヤンマ　38
カブトムシ　19
カルガモ　27
キイロクチキムシ　29
キトンボ　22
キヌツヤミズクサハムシ　5
キマダラルリツバメ　30
キョウトアオハナムグリ　19
クサガメ　14
クルマバッタ　18
クロルリトゲハムシ　10
コサギ　27
ゴマダラカミキリ　38
サ　サラサヤンマ　17
ジムグリ　13
シュレーゲルアオガエル　35・39
ジョウザンミドリシジミ　30
シルビアシジミ　14
スクミリンゴガイ　26
スジグロシロチョウ　31
センチコガネ　43
タ　タイワンウチワヤンマ　26
タマムシ　18
ツマグロヒョウモン　26
トヤマオオミズクサハムシ　9
ナ　ナナフシ　30
ナニワトンボ　21
ニホンアカガエル　19
ニホンイシガメ　17・37
ニホンジカ　23・33・43
ヌートリア　25
ネキトンボ　23
ネブトクワガタ　19
ノコギリクワガタ　39
ノスリ　37
ハ　ハネナガフキバッタ　30
ハネナシコロギス　37
ハラビロカマキリ　23
ハルゼミ　13
ヒメアカネ　17
ヒメクロゴキブリ　38
ヒメツチハンミョウ　11
ヒルハルゼミ　41
フタコブルリハナカミキリ　5
ブルーギル　25
ホシミスジ　39
ホソナガニジゴミムシダマシ　15
ホソミオツネントンボ　9
マ　マユタテアカネ　23
ミシシッピアカミミガメ　26
ミズイロオナガシジミ　30

	ミヤマカラスアゲハ	35・43
	ミヤマカワトンボ	9
	ミヤマクワガタ	19
	ミヤマサナエ	6
	ムカシヤンマ	6
	ムネアカセンチコガネ	39
	メスグロヒョウモン	14
	モリアオガエル	6・35
ヤ	ヤブヤンマ	38
	ヤマカガシ	34
	ヨツスジハナカミキリ	15
	ヨツボシトンボ	38
	ヨツメトビケラ	10
ラ	リスアカネ	21

植　物

ア	アカガシ	41
	アケボノソウ	10
	アセビ	11
	アラゲハンゴンソウ	31
	イシモチソウ	15
	イワヒメワラビ	42
	ウリハダカエデ	42
	エビネ	7
	オオキンケイギク	31
	オミナエシ	13
	オンツツジ	41
カ	ガガブタ	27
	カキラン	14
	カワラナデシコ	33
	キショウブ	27
	キセルアザミ	17
	クリンソウ	5・33
サ	ササユリ	29
	サラサドウダン	6・11・34
	サワギキョウ	17
	シキミ	42
	シモツケ	33
	ジャケツイバラ	42
	スギ	7
	ススキ草原	33
	センブリ	34
タ	タニウツギ	34
	ツクバネウツギ	18
	トウカイコモウセンゴケ	15
	トキソウ	10
ナ	ナルトサワギク	43
	ニシキウツギ	34
	ノリウツギ	7
ハ	ハンカイソウ	9・41
	ヒシ	27
	ヒメカンアオイ	18
	ヒヨドリバナ	37
	ブタナ	27
	フタリシズカ	33
	フトヒルムシロ	35
	ブナ林	11
	ホタルブクロ	29
マ	マルバウツギ	42
	モチツツジ	42
ヤ	ヤブウツギ	35
	ヤマツツジ	31
	ヤマボウシ	31
ラ	リンドウ	13
	レンゲツツジ	5

菌　類

コフキサルノコシカケ	29
ハチタケ	18
マンネンタケ	18

あとがき

「森と水辺の生き物を訪ねて」は（一社）兵庫県治山林道協会の機関誌「やまなみ」に平成25年６月から５年間、10回にわたり掲載されました。今回、これを１冊の冊子にまとめて発行していただくことになり、レイアウト、タイトル等若干の変更を行いました。また、誤同定のため種名を訂正した部分もあります。この企画は第１回の「はじめに」に書いてあるとおり、湿地やため池に生息するネクイハムシという甲虫の探索から始まったもので、その過程で出会うことのできた生き物の紹介です。本来なら和名と学名、引用文献等を掲載するところですが、気軽に読んで頂きたいとの思いもあり和名のみにとどめています。湿地や草原、里山、ため池等は人間の社会生活の変化によって次々と姿を消しつつあります。一番影響が少ないと思われていた森林もニホンジカの食害という思いもよらなかった事態が起きてしまいました。紹介した生き物は簡単に見られる種類ばかりではなく、季節が異なったり、何度も足を運んでようやく撮影できたものもあります。自然はずっと同じであるわけではありません。森はニホンジカにより、ため池は外来生物によりあっという間に姿を変えてしまいました。その「今」をデータで残すことは、私にとってとても重要なことになっています。兵庫県には豊かな自然環境があり、そこには様々な生き物が暮らしています。まだまだ紹介したい場所、紹介したい生き物はたくさんあるのですが、それは次の機会に譲るとともに、本冊子が兵庫県内の生き物を知る一助になれば幸いです。

最後に拙文を「やまなみ」へ掲載して頂いた（一社）兵庫県治山林道協会の太田高正元常務および前田康宏参事を始め、常日頃からご指導いただいている近藤伸一さん、撮影の際協力を頂いた地元の皆様に心からお礼を申し上げます。

2020年６月

佐藤　邦夫

ひょうごの森と水辺の生き物を訪ねて

発　行：（一社）兵庫県治山林道協会
神戸市中央区北長狭通５丁目5-18
TEL. 078-371-0210　FAX. 078-371-6632

発行日：2020年6月

著　者：佐藤邦夫

印　刷：有限会社創文社

ひょうごの森と水辺の生き物を訪ねて